福留久大『リカード貿易論解読法』を読む
－比較生産費説の新地平－
Review on H. Fukudome's "Decoding Ricardo's Trade Theory"
－New Horizons for Comparative Production Cost Theory－

田中 史郎（宮城学院女子大学、名誉）
Tanaka Shiro (Miyagi Gakuin Women's Univ., Prof. Emeritus)

福留久大（1941～2022）の最後の著作『リカード貿易論解読法』（社会評論社、2022 年）は、きわめて論争的な議論を展開している。本書は全 6 章で構成されているが、基本的にはすでに発表されている独立の論文から成っている。内容的に重複する議論も見られるものの、主に以下の 3 点が展開されている。

第 1 に、D.リカード『経済学および課税の原理』の徹底的なテキスト・クリティークにより、比較生産費に対するこれまでの通説的解釈に疑問を呈していること、第 2 に、それを踏まえて、先行研究に対して鋭い批判を行っていること、そして第 3 に、さらに「福留比較生産費説」ないし「福留方式」とでもいうべき積極説を提示していること、以上である。

第 3 の核心部分を示そう。周知のリカードの数字例は、しばしば以下の表のように示される。

	クロス	ワイン
イギリス	100人	120人
ポルトガル	90人	80人

この場合、通説では、イギリスはクロスに、ポルトガルはワインに比較優位がある（労働コストが低い）ので、イギリスはクロス生産に特化し、ポルトガルはワイン生産に特化して、それぞれを輸出し合う…。

これに対して福留は、リカードの「イギリスは 100 人の労働の生産物を、80 人の労働の生産物に対して与えるであろう」という文言を読み込み、ここに「何らかの意味で等価」であることを発見する。そこで、第 1 に、「イギリのスクロス＝ポルトガルのワイン＝40 百ポンド」を基軸として、第 2 に、国家間では「労働価値説」は成立しないが、国内では「労働価値説」が成立するとして、以下の表を導く。

	クロス	ワイン
イギリス	£40百	£48百
（価格の高低）	∧	∨
ポルトガル	£45百	£40百

イギリスのクロスとポルトガルのワインは「40 百ポンド」で売買され、それを基準として両国のクロスとワインの価格を示せば、イギリスではクロスに、ポルトガルではワインに価格上の優位が生じていることが分かる。よって、イギリスではもっぱらクロスが、ポルトガルではもっぱらワインが生産されることになる…。

実はこの数字例の限りでは明示的ではないが、この福留方式は、貿易が「牧歌的な物々交換ではなく、苛烈な（国際）価格競争として展開」されていることを導き出すことになる。

福留の提起した理論、「福留比較生産費説」は、経済学史研究や国際経済学研究に多大な影響を及ぼすことになろう。本報告では、こうした問題を提起したい。